令和３年度７月　オアシス役員会要項　　7.18　小江公民館

1　令和３年度　オアシス夏期研修会の開催に向けて

◆日時・場所　　8月29日（日）10：00～12：00　　於：蒲郡荘２F大島

◆目　的　　これまでのカンボジア支援活動を総括し、それぞれの課題や成果を意味づけることで、コロナ後の新たな活動の構築に資する。特に、カンボジアでの体験に基づき、「きょういくの多様な形」を価値づけ共有し合い、市民との交流会の資料づくりとする。

◆参加者　　講師・助言者（　　）　オアシス社員

◆次　第　　司会進行　（　　）

10：00　あいさつ（趣旨説明）　足立

10：05　提案　「きょういくの形を問う　ー　カンボジアの活動から学んだこと」

①　「協育」に関わって　提案者（　　）　　各10分以内

②　「競育」に関わって　　（　　）

③　「響育」に関わって　　（　　）

④　「共育」に関わって　　（　　）

10：50　４部会協議（各分科会場づくり）

～　　司会（①　　）（②　　）（③　　）（④　　）

講師（　　）（　　）（　　）（　　）

11：30～50　各講師からの高評

お礼の言葉（　　）

◆提案・協議内　容　　別紙参照

◆資料づくり　各提案者は写真の選定・パネル化（金田さんへ）、動画選定（杉浦さんへ）

盆前までに提案骨子に基づき、金田・杉浦さんに資料要請

◆会終了後昼食会開催予定【　　】

2　市民交流会の開催について

◆日　時　11月14日（日）13：30

◆場　所　蒲郡商工会議所コンベンションホール（未予約）

◆内　容　夏期研修会の内容をベースにして

◆形　式　別紙参照

◆講師・参加者　　支援者及び現職教員、報道関係

◆交流会資料の作成　20年11月実施の交流会並みの資料作り　足立・金田圭

◆写真展の同時開催　　夏期研修会使用の写真を中心に５０点ほどのパネル写真（現存使用）

3　バイヨン中学校教育活動写真展に向けて

◆第１回写真展　11月14日（日）　市民交流会当日

◆「きょういく」の分類①～④とそれ以前の教育の姿を分類、5区分に基づき選定（基礎資料参照）

その他　◆支援品輸送事業　JHP・学校をつくる会へ　28年9月実施例にならって

◆ジャパン・ジャスティス（仲田氏）よりプロレス興業の話「収益の一部をカンボジアへ構想」

◆研修会打ち合わせ会　8月21（土）15：00　場所：小江公民館

令和３年度　オアシス夏期研修会の開催について

◆日時・場所　　8月29日（日）10：00～12：00　　於：蒲郡荘２Ｆ大島

◆目　的　　これまでのカンボジア支援活動を総括し、それぞれの課題や成果を意味づけることで、コロナ後の新たな活動の構築に資する。特に、カンボジアでの体験に基づき、「きょういくの多様な形」を価値づけ共有し合い、市民との交流会の資料づくりとする。

◆参加者　　講師・助言者（　　）　オアシス社員

◆次　第　　司会進行　（　　）

10：00　あいさつ（趣旨説明）　足立

10：05　提案　「きょういくの形を問う　―　カンボジアの活動から学んだこと」

①　「協育」に関わって　提案者（　　）　　各10分以内

②　「競育」に関わって　　（　　）

③　「響育」に関わって　　（　　）

④　「共育」に関わって　　（　　）

≪各分科会場づくり≫

10：50　４部会協議

～　　司会（①　　）（②　　）（③　　）（④　　）

講師（　　）（　　）（　　）（　　）

11：30～50　各講師からの高評

お礼の言葉（　　）

◆提案・協議内容

別添基礎資料を参考に、特にバイヨン中学校での実践からみえてきた教育上の成果を「協育」・「競育」・「響育」・「共育」として枠づけし、それぞれの中身を検討・吟味することで私たちなりの教育の可能性の広がりを共有する。

≪詳細別添参照≫

【参考】　市民交流会の開催について

◆日　時　11月14日（日）13：30

◆場　所　蒲郡商工会議所コンベンションホール

◆内　容　「きょういくの形を問う　―　カンボジアでの活動からみえてきたこと」
夏期研修会の内容をベースにして

◆形　式　別紙参照

◆講師・参加者　　支援者及び現職教員、

◆写真展の同時開催　　夏期研修会使用の写真を中心に５０点ほどのパネル写真

令和３年度　オアシス市民交流会の開催について

主題　「きょういくの形を問う　―　カンボジアでの活動からみえてきたこと」

日　時　令和３年11月14日（日）13：30～15：30
場　所　蒲郡商工会議所コンベンションホール（未予約）
参加者　支援者（市民）　現職教員（希望者）　夏期研講師　在日カンボジア人
目　標

> 「カンボジアにおけるよりよい教育の実現を」（SDGｓ４）を掲げて取り組んできたオアシスの教育活動支援は、私たち自身の教育観の広がりをもたらすものでもあった。ここでの成果を吟味・公開することで、改めてきょういくの力を参会者と共に共有したい。

当日集合　11：00　会場準備・展示（昼食）
講師打合　13：00
≪次　第≫
　13：30　はじめのことば（趣旨説明）　〔進行　　〕
　13：35　マジックin カンボジア（平出・中村）
　　※新奇性（未知・恐怖）追求の度合が低い傾向のカンボジア人との関係づくり
　13：50　基調提案（プレゼン）
　　①「協育」②「競育」③「響育」④「共育」を各５分、計20分にまとめて提案
　　提案者（夏期研提案者）〔　　〕〔　　〕〔　　〕〔　　〕
　14：10　休憩（ステージセット）
　14：20　パネル懇話会「きょういくの形を問う」　〔司会者　足立〕
　　パネラー（夏期研講師）〔　　〕〔　　〕〔　　〕〔　　〕
　　※夏期研及び基調提案よりみえてきた当該校の現実と課題
　15：15　総評　〔蒲郡市壁谷教育長〕
　15：25　おわりのことば（お礼のことば）　〔進行　　〕

　写真展　ロビーにてパネル写真展示（50点程）
　事前打合せ　10月24日（日）臨時総会後
　参会者の募集　10月～

その他
　○資料づくり（昨年度月実施交流会並み）
　　９月26日（日）９月役員会において最終確認
　　10月初旬仕上げ発送・配布

コロナ禍からの贈物　― 令和３年度研修会基礎資料として ―

これまでのカンボジア支援活動を振り返ってみたとき、現地での体験から新たな価値の発見があったり、逆にそれまで抱いていた価値が変質したり消えたりと、多様な扉を数多く開いてくれた支援活動でありました。国際交流の地力をそれなりに高めてくれたことも確かでありますし、「＊生きる自信」をその都度感じさせてくれていたような気がして感謝の気持ちをもって受け止めています。

今、ここに新たなカンボジアでの活動を拓こうとするとき、これまでに見え隠れしていた価値をより確かなもとして共有することが重要であると考えます。そこで、以下の視点について役員会・研修会・交流会の場で、より多くの皆さんと共に話し合い吟味し、私たちの取り組みをより価値あるものとして消化していけたらと考えます。

＊「必要とされることのよさ」を実感すること

「私たちの声を、価値をつくろう！」

1　サンタクロース型支援（＊）の在り方として

＊現地の求めに応じて、地域を替え、支援材を変え、主としてハード面提供の支援活動（法人パンフより）

当初、支援活動の中身を決める基本方針は、「カンボジアの貧しさ由来」がほとんどであったと言えます。「何を」提供することが現地の人にとって喜ばれるかが優先され、「どのように提供するか」、さらに「支援後の可能性について」がなおざりにされ、常に上から目線での支援活動のような気がしています。ずいぶん無理な活動もあったと受け止めています。

ア　学校施設の建設とその価値について

イ　給食活動が継続・発展しなかった点を振り返ってみて

ウ　あらたな関係づくりの突破口としてのマジックショー及びサイエンスショーの活用について

エ　民間助成金による支援活動の有益性と問題点について

2　バイヨン中学校の学校づくりに向けて

2013 年のバイヨン中学校開校後のカンボジア支援活動は、自ずと当校へ集中・焦点化されていきました。「私たちに求められるもの」と「私たちが期待するもの」が程よく融合し、成果として実感できるものが多々あったと受け止めています。そこには、現地学校関係者と私たちとの関係性の高まりや求めに応じることのできる力（意志・意欲、資金・技術・技能、記録取り等）があったことはお互いに認め合えるところです。

運動会の成功・発展が子どもたちの可能性を大きく拓いたことについて

地域住民が学校教育に意義を感じていないような場合においては、何よりも教育の成果を目に見える形で、特に生徒の溌溂と学ぶ姿を示すことが効果的であると考えます。その意味において、バイヨン中学校が本法人の指導方針を受け止め運動会を実現させたことは、以後、当校の教育全般に多大な影響を与えたと捉えています。

以下に、運動会の実現に関わって、その多様な影響を振り返り価値づけてみました。

◇ 旧来の当地域の学校教育の現状

◆貧困が子どもたちを学校から家庭内労働に吸収している現状

◆カンボジアの教員養成の脆弱さから端を発して停滞する学校教育
教員の待遇問題、臨時採用の先生たちのレベルの問題、学校運営資金など

◆生徒数や教科に対応できていない教員の質と数の不足による問題
教員養成校の不足と指導者の不足、技能・芸術教科の教員養成の問題

◆教室不足及び無電化地域の影響による学習環境の劣悪さ（2017 年一部地域内通電）

◆可動しにくい椅子と机、紙媒体の使用が限定された学習条件

◆最も利用度の高い教具としての黒板の劣悪さ（日本レベルの黒板の現地生産は不可能）

◆活用できる教具の貧弱さと教科書説明に終始する教授法（インプット型授業形態）
但し、英語の評価テストは教師との対話中心でアウトプット型

◆理解させる、身に着けさせるはあっても、「伸ばす」がない現地先生たちの指導理念
学年相応の学力を持たないものは進級させないという体制

◆

① 運動会を通しての協働意識の涵養が≪協育の形≫を育てる

バイヨン中学校における学校づくりの起爆剤として位置づく運動会の具現化、その中で「協働する喜び」を体感した先生・生徒たちの学びの味わいは、単に学力向上だけでなく教育の可能性を広げる活動となっていった。

◆広い校地（3 ha）の確保と広いグランド（200m トラック）の設置

◆ルー校長のリーダーシップと親日性・先見性

◆校長だけではつくり上げきれない運動会の構想、全教員が動き生徒も参画する活動に

◆金田先生の指導基準を下げない、ぶれない体育授業（集団行動、ラジオ体操など）

◆新奇な活動としての集団行動に意欲を見出させていた生徒たちとその指導

◆学校関係者による日本での運動会体験・研修の積み上げ

◆運動会の副次的活動としての始業前学校朝会とラジオ体操の全校集団活動

◆運動会の地域への広報とさらなる発展行事としてのバイヨン中文化祭の実現

◆学校意識（集団で学ぶことの喜び）の向上が退学者の減少へと

≪協育の形≫としてみえてきたもの

・自他の多様な能力の把握（リーダー性、協力性、技能・技術、運動能力など）
・先生・学友と共につくり上げることへの誇らしさ、晴れがましさ、嬉しさの味わい
（運動会においては、保護者・地域の人ら声援と共感が、これらの味わいに繋がっている）
・集団（協働）での学びの力強さ、迫力の実感　など

② 協育の中での学びが、切磋琢磨する≪競育の形≫を醸成する

他者と協働してことに当たったりする場合、自他との能力の違いを感じ取り自覚していく過程で競争意識が育っていく。単に、相手に勝った負けたということだけではなく、他者のよさに気づきそれらに憧れ、自分自身の内に少しでも取り込もうと努力することである。

◆常に教師対学習者（個人）の関係で進めてきた学校教育の停滞、とりわけ退学者を多く出してきている進級試験等の問題（義務教育の意義と課題）
◆グループ・ペアなど多様な学習集団による討議・課題解決・制作等の学習経験がない現実
◆進路（大人）への期待を持てないことによる学習結果（月間学習成績発表掲示）の形骸化
◆ 学びの楽しさを視野に入れない授業実践の積み上げ
◆内戦時代（70・80年代）子どもだった大人たちの教育への信頼性の希薄さ
◆

↓

◆チーム対抗競技を多用し、他者との連携・協力を図りながら技能の向上を目指した体育授業（陸上・サッカー）
◆新奇な学習体験（家庭科・美術）による作品作りを通して、自他の新たな能力の発見
◆体育授業の発展として生まれたサッカー部、3人の全国入賞者を出した陸上部
◆自分たちの考えや操作によって教科書の内容が具現化していく学び（理科実験学習）
◆ピアニカ演奏技能の向上を目指し、リーダーの指導による自主的な練習活動
◆集団行動（特に隊形の位置取り、整列）の迅速化（学校朝会や生徒会運営など）
◆

≪競育の形≫としてみえてきたもの

・多様で優れた能力が顕在化し、それらを組織化することで切磋琢磨が高まり、さらに優れた能力獲得が図られている。
・学校・学級・グループをリードする自主的的な活動が増える。（生徒会の組織化と実践）
・競争関係を越え、相互にフォローしたりリードしたりする切磋琢磨の関係が生まれ、社会活動の基礎的能力が培われていく。

③ 憧れや期待をもつことが≪響育の形≫を育む

「教師が変われば授業が変わり、授業が変われば学校（教育）が変わる」。日本の教職経験者の間では言い古された言葉であります。私たちの教育活動支援の構想に呼応しようとするバイヨン中学校のルー校長は≪響育者≫の代表であると受け止めています。ルー校長だからこそ支援の継続が果たせたといっても過言ではありません。そして、当校の先生たちも・・・。

◆体育専科教員の確保に尽力した校長・JST 及びオアシス

◆当初他人事であった私たちのモデル授業実践に、補佐に入ってくれるバイヨンの先生たちが年々増加してきている。

◆プロジェクター、実験器具、自作資料、生徒全員に配布の教材を使用したモデル授業を参観し、より具体的な授業づくりに挑戦し出した先生たち。教室掲示としての授業記録（板書記録）が増えてきている。

◆モデル授業に加え、日本の学校現場での 7 回の実地研修は響育を普及する場となっている。

・愛知の学校の清潔さを手本とした美化活動

・愛知の先生と生徒のフレンドリーな関係が、授業づくりのイメージを変容させつつある。

・先生たちが協力をして学校を運営している愛知の学校（校長がいなくても、教頭や他の先生たちが校長の役割を担っている）⇒バイヨンの若い先生たちの意識変化

・学校組織の多彩さを教職員全員が協力して支えていることを目の当たりに感じ取り、学校づくりに参画しようといった意欲がバイヨンの先生たちの間に高まってきている。

・学校を盗難等から守ろうといった生徒たちの自主的な宿直活動がみられる。

≪響育の形≫としてみえてきたもの

・オアシスの先生たちの教材・資料づくりの工夫に、授業の新たな可能性を実感として味わう。

・新たな教育の世界に触れ、これまでの既定の取り組みをシャッフルする場がつくり出される。その意味において愛知での実地研修は響育の場として非常に有効である。

・学校関係者一同が、校長の方針のもと志を共有することの重要性がみえてきている。

3　≪共育の形≫としてみえてきたこと

私たちの支援活動は、必ずしも現地との志を共有したものとは言い難く、自己満足に留まっていた場合も多々あったと反省しています。しかし、紆余曲折の中、次第に現地の期待が捉えられるようになり、それらに向けての工夫と努力がそれなりの成果としてみえるようになった時、私たち自身の成長が感じ取れるようになってきました。もうそこでは「支援」といった言葉は不釣り合いなものとなり、オアシスとカンボジアとの好循環のサイクルが形成されつつあります。言い換えるなら、私たちの活動は、≪共育の形≫へと変容してきていると受け止めることができます。